

寓意と史実（続稿）： 阮籍の四言「詠懷詩」をめぐって

著者	沼口 勝
雑誌名	中国文化：研究と教育
巻	67
ページ	29-43
発行年	2009-06-27
URL	http://doi.org/10.15068/00150677

寓意と史実（続稿）

―阮籍の四言「詠懷詩」をめぐって―

沼口 勝

はじめに

魏の阮籍（字、嗣宗 二一〇～二六三）の四言「詠懷詩」（十三首）の連作には、その隱微な表現の奥に作者の晩年に継起した権臣の司馬氏に対する魏朝勢力の抵抗（たとえば淮南に拠った諸葛誕の叛乱や高貴郷公のクーデターのごとき事件）とその凋落を寓意するものがあるようである。（其二）の詩をとりあげた前稿に引き続き、以下（其四）（其十）（其十三）の三首の詩の解釈を通して、そうした点を解明したい。なお、テキストとしては民国・黄節註『阮步兵詠懷詩注補篇』を用いた。

一

（其四）の詩は全二十二句、それを八・八・六句の三段落に分けて考察を加えたい。まず第一段落に描く景の蔵す

る寓意について解明したい。

陽精炎赫 陽精炎赫として

卉木蕭森 卉木蕭森たり

谷風扇暑 谷風暑を扇ぎ

密雲重陰 密雲陰を重ぬ

激電震光 激電光を震ひ

迅雷遺音 迅雷音を遺す

零雨降集 零雨降集し

飄溢北林 北林に飄溢す

天空から陽の精氣の集積たる太陽が熱く照りつけ、大地に草木が鬱蒼と生い茂っている。谷風（東風）が吹いて暑さを扇ぎ、密雲が暗くあたりを覆った。激しい稲妻が閃光で空中を切り裂き、迅雷が轟音を遺していく。細雨が降って集まりかさを増し、北の林に溢れ出した。以上がこの八句の景の表層の解釈である。

次に前半の四句について探索を加えたい。

第一句「陽精炎赫」と第三句「谷風扇暑」に類する句を、以下の三篇の文中に見出すことができる。

〔Ⅰ〕惟れ黃初七年五月七日、大行皇帝崩す。嗚呼哀しい哉。時に於いて天震ひ地駭き、山を崩し霜を隕し、陽精景を薄くし、五緯錯行す。百姓吁嗟し、萬國悲傷す。

〔魏・曹植「文帝の誄」の「序」〕

〔Ⅱ〕徳は先王に儕しく、功は太古に侔し。上靈（上帝のみたま）瑞を降し、黃初^は初めて祐あり。河の龍と洛の龜と、波を凌いで下に遊ぶ。平均なること繩に應じ、神鸞翔舞す。莢^{こゝろ}を階除に數へ、系風暑を扇ぐ。皓き獸と素き禽と、郊野に飛走す。神鍾と寶鼎と、舊土より形^{あらは}る。雲英（雲母）と甘露と、塗を^{ぬり}瀾し字を被ふ。靈芝沼を冒し、朱華渚を蔭ふ。回回たる凱風、祁祁たる甘雨。稼穡豊かに登り、我が稷我が黍。家ごとく恵君を佩び、戸ごとく慈父に蒙る。〔Ⅰ〕の誄の本文

〔Ⅲ〕方今蕤賓時を紀し、景風物を扇ぎ、天氣和暖にして、衆果具に繁る。時に駕して遊び、北のかた河曲に遡ふ。從者は箛を鳴らして以て路を啓き、文學は後車に託乗す。節は同じくして時は異なり、物は是にして人は非なり。〔魏・文帝不「朝歌の令吳質に與ふる書」〕『文選』卷四二

所収

〔Ⅰ〕は、皇帝の崩御を悲しんで、天変地異が生じ、太陽もひかりを失い、金木水火土の五星は運行を乱し、万国の人民が悲嘆したことを述べている。そして続く〔Ⅱ〕の「誄」の本文は、文帝の統治した黃初の世のめでたさを述べたもの、〔Ⅲ〕は、友人の吳質に対し曾遊の樂しみを回顧し、同じ陰曆五月の好季節に遊覽しても、旧友たちのすでないことにいだく悲哀の情を訴えた書の一節である。

〔Ⅰ〕の「陽精」は、緯書の一「龍魚河圖」に「陽精を積んで日と爲る」（『御覽』卷四引）とあるように日、太陽。「陽精薄景」とは、日がひかりを失うこと。ここでは天子の崩御を悲しむ天意のあらわれと解されるだろう。〔Ⅱ〕の「系風扇暑」の「系風」について、趙幼文氏は「系は疑ふらくは景の字の形の誤りならん」という。⁽³⁾

〔Ⅲ〕に「景風扇物」といい、その李善注に「禮記に曰く、仲夏の月、律は蕤賓に中る。易通卦驗に曰く、夏至には、則ち景風至る」とある。「景風扇暑」は仲夏暑さを扇ぐ景風の吹くことをいう。なお文帝不にはその「柳の賦」にも「景風扇きて煖を増す」という用例が見える。

以上を踏まえて阮詩の場合を推測すると、「陽精炎赫」は太陽が熱く照りつけること、転じて天子が若く勢い盛ん

であることをあらわすか。『谷風扇暑』の「谷風」は『爾雅』によれば「東風之を谷風と謂う」という。「暑を扇ぐ」とあるから、この場合の谷風は景風と同じ仲夏五月の風を指すのだろうか。つまりこの四句の表現は、若く勢い盛んな天子のもと、朝廷も草木の繁茂するように繁栄に向かおうとしていた（東風が暑さを扇ぐ）陰曆五月、にわかには厚い雲がたれこめあたりが暗くなったかのように情勢が暗転したことを寓意するものと解したい。その若き天子こそ高貴郷公そのひとだろう。『魏書・三少帝紀』の裴松之注に引く『魏氏春秋』に、司馬師（景王）から即位直後の高貴郷公の印象を問われて、鍾会が「才は陳思に同じく、武は太祖に類す」と答えたという。

後半の四句は、激電降雨の天候の激変を述べている。『魏書・三少帝紀』の「甘露五年」の記事「五月己丑、高貴郷公卒す、年二十」に付した裴松之注所引の『魏氏春秋』は、司馬昭の圧迫に堪えかねた高貴郷公が、無謀にも自らこれを討たんとして返り討ちにあった際、阮詩のあらわす天候の激変に類する現象のあったことを記述している。

戊子の夜、帝自ら亢じやうけつ從僕射李昭、黃門從官焦伯等を將る陵雲臺を下り、鎧仗もて兵に授け、際會に因り、自ら出でて文王を討たんと欲す。會たまま雨ふる、有司日を卻き

けんことを奏すれども、遂に王經等を見て黃綯の詔を懷より出し曰く、「是れ忍ぶ可くんば、孰か忍ぶ可からざらん。今日便ち當に此の事を決行すべし」と。入りて太后に白し、遂に劍を抜き輦に升り、殿中の宿衛・蒼頭・宦僮を帥る戰鼓を撃ち、雲龍門を出づ。賈充外よりして入る、帝の師潰散するも、猶ほ天子を稱し、劍を手にして奮撃すれば、衆敢へて逼る莫し。充將士を帥る厲まし、騎督成倅の弟成濟矛を以て進む、帝師に崩ず。時に暴雨雷霆あり、晦冥す。

『文帝の誅』の「序」に、皇帝の崩御に際し「天震地駭、崩山隕霜、陽精薄景、五緯錯行」と天地日月星辰も異変を呈現して哀悼の意をあらわしたとあるが、同じく『魏氏春秋』の異変の記述も、高貴郷公の死に天意が感応したものとすなわち皇帝の死を象徵するものと解するのだろうか。こうした解釈は、後漢初めの成立とされる七緯の一、衆緯のうちの『稽耀嘉』に舜禹禪讓の際、天意の大いなる変化をあらわす異変があったことをいうのに基づくのだろう。

禹將に位を受けんとするや、天意大いに變じ、迅風木を靡かし、雷雨晝冥し、以て將に虞を去り夏に適かんとするを明かにするなり。（『稽耀嘉』）

以上を要するに、阮詩の冒頭四句の景は、まず「陽精炎

「系風扇暑」が「文帝の誅」とその「序」の「陽精薄景」

「系風扇暑」という表現を踏まえて、文帝と同じく陰曆五月仲夏の季節に起きた若き天子の死を暗示し、繼いで第五句以下の四句により、それが高貴郷公の弑虐事件であることを天候の激変を描くことにより暗示したものと解される。

「北林」は、『詩経・秦風』「晨風」に「馱たる彼の晨風、鬱たる彼の北林」という興の表現に基づき、毛伝（毛詩）

の「小序」はこれを晨風が疾飛して鬱然と繁る北林に入るように、先君（穆公）が招くと賢人が帰往することをたとえたのだとする。とすれば「北林」は朝廷を象徴したことばか。第七・八句は、高貴郷公の死を悼む人々の悲しみが朝廷からあふれ出したことをあらわすと解したい。

続いて第二段落八句の解釈を試みることにしよう。

汎汎輕舟 汎汎たる輕舟

載浮載沈 載ち浮かび載ち沈む

（浮きを載せ沈きを載す）

感往悼來 往に感じ來を悼み

懷古傷今 古を懷ひ今を傷む

生年有命 生年命有り

時過慮深 時過ぎ慮深し

何用寫思 何を用つて思ひを寫かん

嘯歌長吟 嘯歌長吟せん

まず第九・十句の寓意の吟味に入りたい。この二句はその措辞から、次に掲げる『詩経・小雅』「蓍蓍者莪」の第四章をその典拠とするものだろう。

汎汎楊舟 汎汎たる楊舟

載沈載浮 載ち沈み載ち浮かぶ（一説に、沈を載せ

浮を載す）

既見君子 既に君子を見る

我心則休 我が心則ち休す

「蓍蓍者莪」について毛伝の「小序」は、「蓍蓍者莪は、

材を育するを樂しむなり。君子能く人材を長育すれば、則ち天下之を喜樂す」という。そして、その第四章前半二句について、毛伝は、「楊木もて舟を爲れば、沈きを載せても亦浮かび、浮きを載せても亦浮かぶ」といい、鄭箋は、「舟は沈物も亦載せ、浮物も亦載す。人君子を用ふるに、文も亦用ひ、武も亦用ふ、人の材に於いて廢する所無きに喩ふるなり」という。清・王先謙『詩三家義集疏』に魯詩説として挙げるのは、『淮南子・説林訓』の「舟は能く沈み能く浮かぶ、愚者は足を加へず」の文に後漢・高誘の付した注「舟船は能く浮物を載す、愚者は敢へて足を加へず、其の沈むを畏るればなり。詩に曰く『汎汎たる楊舟、

浮を載せ沈を載す」と、是れなり」というものである。⁽⁵⁾そして、この高誘注から魯詩と毛詩が同文であることは明らかだといふ。

以上の解釈を、前述の阮詩の二句に適用すれば、輕舟が輕重を問わずいかなる物をも載せて流れを疾駆するように、為政者が文武を問わず広く人材を登用しようとすることを暗示したと解せよう。高貴郷公が敗北した後、元帝奐（陳留王）が即位するが、その実権の所在は文王司馬昭にあった。したがって詩中で広く人材を登用することを暗示している為政者とはおそらく司馬昭を指すにちがいない。

続く六句は、往昔に感じ將來を悼み、古を懷いまた今を悲傷しつつ、限りある人生を思えば、時の過ぎゆくことに憂慮は深まるばかり、この思いを何によつて取り除こうかうそぶき歌い長く吟じよう、といふ。

以上の解釈に従えば、第二段落は、司馬昭が着々と禪讓を進める中で、過去を顧み現在を見つめ、また魏朝の將來を悼むとき、有限の人生と時代とに対する憂慮が深まるばかりで、これを取り除くには嘯歌長吟によることをいふ。これを承け第三段落では、王法（国家の制度法律）を堅守して生きようというほどの堅固な志はない、世事に一喜一憂することなく、聖賢の教えを慰めとして余生を送ろうと

述べている。ここに司馬氏の政權と距離をおこうとする晩年の作者の態度が吐露されていると思う。

誰能兼志 誰か能く志を兼ること

如玉如金 玉の如く金の如くせん

處哀不傷 哀に處りて傷らず

在樂不淫 樂しみに在りて淫せず

恭承明訓 恭しんで明訓を承け

以慰我心 以て我が心を慰めん

黄節によれば、第十七・十八句は『春秋左氏伝』昭公十二年、楚の靈王との問答において右尹の子革が誦してみせた「祈招」の詩の一節「我が王度を思ひ、式て玉の如く式て金の如くす」により、同じく第十九・二十句は、『論語』八佾篇「子曰く、關雎は樂しみて淫せず、哀しみて傷らず」によるものである。

二

〈其十〉の詩全二十句を四・四・八・四句の四段落に分けて解釈を試みることにする。

微微我徒 微微たる我が徒と

秩秩大猷 秩秩たる大猷と

研精典素 典素を研精し

思心淹留 思心淹留す

第一段落前半二句は、『詩經』の語句を用いている。

まず第一句、「微微」は、勢いの振るわないさま。例えば魏・曹植「武帝の誅」に「微微たる漢嗣、我が王之を匡ふ」とあるがごとき用法だろう。「我が徒」は、『詩經・小雅』「黍苗」に「我が徒我が御、我が師我が旅」とあり、「徒」はその毛伝に「徒行する者」、鄭箋に「歩行を徒と曰ふ」とそれぞれ説く。すなわち、徒歩で行く者、歩兵。〔詩經・小雅〕「車攻」の「徒御驚かざらんや」の毛伝に「徒は輦なり、御は馬を御するなり」という。これによれば、輦を輓く兵士を指すとも解される。

第二句は、『詩經・小雅』「巧言」第四章「奕奕たる寢廟、君子之を作る、秩秩たる大猷、聖人之を莫る」の文中の一^{はか}句、その毛伝に「秩秩は、知を進むるなり」、また鄭箋に「猷は、道なり、大道は、國を治むる禮法なり」という。

要するにこの二句は、天子の率いる勢い振るわざる歩兵と、聖人の定めた治国の礼法とを指すのだから。

次に後半第三・四句の内容の検討に移ろう。まず「研精典素」であるが、これは古典をくわしく研究すること。典素は三墳五典と八素（八素は八卦）。類似の用例として曹丕「中山王の黃龍頌を獻するに答ふる詔」に「王は墳典を

研精し、道眞に耽味す」、また阮籍「晉王に與へ盧播を薦むる書」に「墳典を研精し、堂に升り奥を觀る」などがある。第四句「思心淹留」は、君主の思慮がとどこおること。『漢書・五行志、第七下之上』に引く『洪範五行伝』に「思心の睿ならざる、是れを不聖と謂ふ」という。漢・伏勝は、「思心とは、心の思慮なり、睿は寛なり。孔子曰く『上に居りて寛ならざれば、吾何を以て之を觀んや』と。上寛大にして臣下を包容せずんば、則ち聖位に居る能はざるを言ふ。（略）凡そ思心傷るる者は土氣を病む、土氣病めば則ち金木水火之を沴ふ、（略）其の極を凶短折と曰ふ」と説く。『凶短折』とは六極の一で、凶は動いて吉に遭わないこと、短は六十未満で死ぬこと、折は三十未満で死ぬことという。すなわちこの聯は、古典に造詣深い君主が、その思慮のとどこおつて、天折する結果を招いたことを意味するものである。魏は土徳を以て漢の火徳を承けたとされる。伏勝によれば、今その土氣が病み、五行のうちの他の徳をもつ者と交代する命運にあることになる。とすれば、ここの「思心」の所有者は高貴郷公以外にはないだろう。

前述したように、甘露五年五月己丑、高貴郷公は司馬昭の專權に憤り、自ら僮僕數百を率い、司馬昭討伐に打つて出る。その事の顛末を語る『魏書・三少帝紀』「高貴郷公

髦」の条の裴松之注に引く『漢晉春秋』の記事を掲げる。

帝威權の日に去るを見、其の忿りに勝へず。乃ち侍中王沈、尙書王經、散騎常侍王業を召し、謂ひて曰く、「司馬昭の心、路人も知る所なり。吾坐して廢辱を受くる能はず、今日當に卿等と與に自ら出でて之を討つべし」と。王經曰く、「昔魯の昭公は季氏に忍びず、敗走して國を失ひ、天下の笑ひと爲る。今權は其の門に在ること、日爲ること久し。朝廷・四方皆之が爲に死を致し、逆順の理を顧みざること、一日に非ざるなり。且つ宿衛は空闕、兵甲は寡弱、陛下何の資用する所ぞ。而も一旦此くの如くなれば、乃ち疾を除かんとして更に之を深むる無からんや。禍ひ殆ど測られず。宜しく重ねて詳らかにせらるべし」と。帝乃ち懷中の版令を出し地に投じ、曰く、「之を行ふこと決せり。正使^{たと}ひ死すとも、何の懼る所ぞ。況や必ずしも死せざるをや」と。是に於いて入りて太后に白す。沈・業奔走して文王に告ぐ、文王之が爲に備ふ。帝遂に僮僕數百を帥ゐ、鼓譟して出づ。文王の弟屯騎校尉卬入り、帝に東の止車門に遇ふ。左右之を呵す、卬の衆奔走す。中護軍賈充又帝を逆へて南闕の下に戦ふ、帝自ら劍を用ひ、衆退かんと欲す。太子舍人成濟充に問ひて曰く、「事急なり。當に云何^{いか}んすべき」と。

充曰く、「汝等を畜養するは、正に今日を謂へばなり。今日の事、問ふ所無きなり」と。濟即ち前^すみ帝を刺す、刃背に出づ。文王聞き、大いに驚き、自ら地に投じて曰く、「天下其れ我を何と謂はんや」と。太傅の孚奔往し、帝の股に枕して哭し、哀しむこと甚だし。曰く、「陛下を殺すは、臣の罪なり」と。

宿衛の兵士もほとんどなく、武器・甲冑も寡弱で、ただの僮僕數百からなる右の高貴郷公の率いる部隊、これを阮詩において「微微我徒」と表現したのではないだろうか。

それでは続く「秩秩大猷」の句の指す事象はなにか。

高貴郷公が敗死（卒年二十）した後の皇太后の令に、「吾不徳を以て、家の不造に遭ひ、昔東海王の子髦を援立して、以て明帝の嗣と爲す。其の書疏・文章を好むを見て、冀はくは成濟す可しと。而るに情性の暴戾、日に月に滋^{ます}す甚だし。吾數ば呵責すれども、遂に更に忿恚し、醜逆不道の言を造作し以て吾を誣謗し、遂に兩宮を隔絶す（云々）」と、その好學を見込んで将来の大成に期待し推挙したにもかかわらず、非道不孝の言動をなすにいたったことを述べている。ここに指摘する高貴郷公の非道不孝の言動は、もとより司馬昭の圧力により捏造曲筆されたものだろうが、その無謀の拳兵が社稷を顛覆させる大なる不孝の行為に当たる

とみなすこともまた可能だろう。この一聯は、高貴郷公が「微微たる我が徒」を率い挙兵を敢行し自滅したこと、聖人のこれをはかるところの「秩秩たる大猷」すなわち治国の礼法を守ること、いずれを取るべきであつたかどうか、という問いかけではないかと思う。

高貴郷公が儒教の經典に造詣深く、裴秀・司馬望・王沈などの名流と講論したことは『三少帝紀』にも記載された著名な事実である。この「典素を研精」した天子が、「思心淹留し」、すなわち司馬昭憎しの思いに囚われるあまり、短慮の行為に走つた悲劇を第二聯でいうものと解したい。

なお、『三少帝紀』の裴松之注に引く『世語』に、「淹留」の語を用いた逸話が記載されている。それは司馬宣王（司馬懿）の知遇を得て拔擢され晋朝の重鎮となつた石苞に、高貴郷公に關し文王（司馬昭）との間で微妙な言動のあつたことを伝えたものである。

〔石苞〕甘露中入朝し、還るに當つて、高貴郷公に辭し、中に留まること盡日なり。文王人を遣り過ぎらしむることを要む。文王 苞に問う、「何ぞ淹留するや」と。苞曰く、「非常の人なればなり」と。明日發して祭陽に至る。數日にして難^がずる。

右の問答が含む真意を推測してみよう。司馬昭が石苞に

終日中に留まっていた（淹留）理由を問うたのに対し、石苞は高貴郷公が「非常の人」だからと答えている。つまりその際の高貴郷公の言動に石苞を淹留させた「常に非ざる」異常の情況があつたのである。おそらくそれは司馬昭討伐の挙兵を強行する意図のあることをあらわすものであつただろう。石苞はそれを感知し、「非常の人」という言い方で示唆したので。司馬昭は阮籍を重んじその從事中郎に引いたことが『晋書』の本伝にある。したがつて阮籍は右の事情にも通じていたから、そこで高貴郷公とらわれた司馬昭憎しの思いを「思心淹留」と表現したのではないだろうか。

第二段落の二聯四句について検討を加えよう。

適命僕夫 適ち僕夫に命じ

興言出游 興ちて言に出游す

浩浩洪川 浩浩たる洪川

汎汎楊舟 汎汎たる楊舟

第五句は、こころの憂いをのぞくべく僕夫に命じ出游することを詠う。第六句は、『詩經・邶風』「泉水」、また『衛風』「竹竿」の詩に「駕して言に出游し、以て我が憂いを寫かん」というのを模した表現だろう。その出游により目にした風景、すなわち広々とした大河、その流れを輕快

に下る楊の舟、それが第七・八句の表層の意味であるが、すでに「其四」の詩で検討したように、第八句は『小雅』「菁菁者莪」の「汎汎たる楊舟、沈を載せ浮を載す」に由来する句であるから、為政者が文武を問わず広く人材を登用することを暗示するものだろう。阮詩の場合、それは晋朝創立を目前にする司馬氏を指すとしなければならぬ。

第三段落の八句は、天空に懸かる太陽の光芒、大地を貫流する江河の波流が、瞬時もとどまることなく、一は東から西へ、また他は一路東をさして遷逝するように、万物は時とともに推移消滅し、また冬去り夏来たるというように四季が交代する、それは春の繁華が秋の落葉となることにあらわれるという。

仰瞻景曜 仰いで景曜を瞻

俯視波流 俯して波流を視る

日月東遷 日に月に東に遷り

景曜西幽 景曜西に幽る

寒往暑來 寒往き暑來り

四節代周 四節代周す

繁華茂春 繁華春に茂り

密葉殞秋 密葉秋に殞つ

前の二段落において作者は、高貴郷公が悲劇的な死を遂

げ、いまや司馬氏の晋王朝が創建されようとする時代の變遷を暗示した。この段落はそれを承け、時の推移と季節の交代を述べ、人世も自然の摂理に従わざるをえないことを歎ずる。そのために魏朝の天子であり、時の流れを回顧する感覚にすぐれる曹丕の詩文表現を模することを試みる。まず第九・十句と「雜詩」二首（其一）の「俯して清水の波を視、仰いで明月の光を看る」、第十三・十四句と「寡婦の賦」の「三辰周りて遞に照らし、寒暑運りて代る臻る」、また「柳の賦」の「四氣邁みて代る運り、冬節を去つて春に渉る」などを挙げることができる。「寡婦の賦」は、阮籍の父瑜が逝き、その夫人と孤兒とが遺されたことを傷んで作ったもので、その遺孤とはおそらく籍を指すだろう。その序文を掲げる。

陳留の阮元瑜、余と舊有り、薄命にして早く亡す。其

の遺孤を存するに感ずる毎に、未だ嘗て愴然として心を傷ましめずんばあらず。故に斯の賦を作り、以て其の妻

子の悲苦の情を敘し、王粲に命じ並びに之を作らしむ。

前述のように阮詩に曹丕の詩文の表現を模したと思われる点があるのは、それにより父瑜と深い関係にあった魏朝の盛時を慕う感情をあらわしたものではないだろうか。

第四段落の四句は、人間世界に榮枯盛衰は必至の常期で

あるから、残年を楽しんで、世と争うことなく生きること
を詠う。

盛年衰邁 盛年衰へ邁き

忽焉若浮 忽焉として浮かぶが若し

逍遙逸豫 逍遙逸豫し

與世無尤 世と尤むること無かれ

第十八句「忽焉若浮」は、五言「詠懷詩」〈其三十二〉

に「孔聖は長川に臨み、逝くこと忽ち浮かぶが若きを惜しめり」というのに似る。この一聯は、いうまでもなく『論語』子罕篇に記録する、孔子が川のほとりに立ち、流水を見て、「逝く者は斯くの如きか、晝夜を舍かず」といい、万物の推移してやまないのを嘆じた故事にもとづくものである。

三

〈其十三〉の詩全二十二句を四・四・四・四句の五段落の構成として解し、その内容について検討を加えたい。

晨風掃塵 晨風塵を掃ひ

朝雨灑路 朝雨路に灑ぐ

飛駟龍騰 飛駟龍騰し

哀鳴外顧 哀鳴し外顧す

第一段落は、まず早朝雨のそそぐ都大路を天に飛騰する龍のような勢いで疾駆する四頭立ての馬車がいきなり現れる。なにか緊急の事態があつて、宮中から駆け出すものらしい。そして馬たちが哀鳴しつづ、外顧していると描写しているところはなだ訝しく思われる。この叙景はいったいなにを意味しているのか。まず「外顧」の語意をさぐることから始めたい。

「外顧」の用例としては、晋・陸機「五等諸侯論」(『文選』卷五十四所収)の文中、呂后の死後その一族が乱を起こそうとした際、都長安にあつてその陰謀を知った朱虚侯章が、兄の齊王襄(齊の悼惠王肥の子)に呂氏討伐の兵を發して長安に向かうよう告げ、朱虚侯とその弟東牟侯興居が大臣(周勃・陳平等)とともに内応して呂氏を誅し、また、代王を迎え天子に立てようとした際、この動きを疑い抑える意見があつたが、宋昌がこの懷疑論を一掃し文帝即位が実現したことをいう一節にある。次に掲げよう。

然れども呂氏の難に、朝士は外顧し、宋昌は漢を策り、
必ず諸侯を稱せり。

上述のようにここでは、朝廷の外にいる諸侯をたのむことをあらわす。顧とは、たのむ、顧託する意であろう。

陸機の文の用例は、阮詩のそれよりも後れるが、その含

意には近いものがあるのではなからうか。しかしそれに就いては、以後の段落の解釈を進めたうえで明らかにしたい。

第二段落の検討に入る。

攬轡按策

轡を攬り策を按おさへ

進退有度

進退度有り

樂往哀來

樂しみは往き哀しみは來たり

悵然心悟

悵然として心に悟る

この二聯四句から、前掲の文帝丕「朝歌の令吳質に與ふる書」の南皮の遊を叙した文章を想起するのは筆者だけではないだろう。次にその一節を掲げてみよう。

昔日南皮の遊びを念ふ毎に、誠に忘る可からず。(略)

北場に馳騁し、南館に旅食す。甘瓜を清泉に浮かべ、朱李を寒水に沈む。白日既に墜れ、繼ぐに朗月を以てす。同に乗り並び載りて、以て後園に遊ぶ。輿輪は徐に動いて、參從は聲無し。清風は夜起りて、悲笛は微吟す。

樂しみは往き哀しみは來たり、悵然として懷を傷ましむ。阮詩の後聯が、曹丕の「樂往哀來、悵然傷懷」を模した表現だろうことは、一目瞭然といつてよい。作者はこの二聯により、魏朝の盛時が去つて、衰運がめぐつてきたことを悲しむのである。

第三段落は、乱世に生きる苦しみを述べ、明君の治世を

懷顧して歲月の過ぎるのを嘆くことをいう。

念彼恭人

彼の恭人を念ひ

眷眷懷顧

眷眷として懷顧す

日月運往

日月運り往き

歲聿云暮

歲聿に云に暮る

この二聯四句は、『詩經・小雅』「小明」の詩を典拠とする。その「小序」には「小明は、大夫亂世に仕ふるを悔ゆるなり」といい、鄭箋は「篇に名づけて小明と曰ふ者は、幽王日に其の明を小にし、其の政事を損なひ、以て亂に至るを言ふ」と説く。その第二章は次のように詠う。

昔我往く、日月方に除す、曷ぞ其れ還ると云はん、歲事ことに云に暮る、念ふ我獨りなり、我が事孔だ庶し、心の憂ふる、我を憚るに暇あらず、彼の共人を念ふ、睠睠として懷顧す、豈に歸るを懷はざらんや、此の譴怒を畏る。「小明」の詩の三句の表現がほぼそのまま阮詩に用いられている。「共人」を「恭人」に作るのは三家詩中の齊詩であるというのが、清・王錢謙『詩三家義集疏』の説である。阮籍はその家学として魯詩であるはずだが、ここについては懸案としておきたい。

さて、「共人」の意について、鄭箋は「共人は爾なの位に靖共して、以て賢者を待つ君」であると説く。これによ

れば其人とは、謙譲にして賢者を待つ明君をいい、阮詩の「恭人」とは、第二段落との関連からすると、おそらく文帝曹丕をさしていると思われる。

第四段落は、高貴郷公曹髦の死を寓意するものだろう。

嗟余幼人 嗟^あ余が幼人

既頑且固 既に頑にして且つ固なり

豈不志遠 豈に遠きを志さざらんや

才難企慕 才は企慕し難し

命非金石 命は金石に非ず

身輕朝露 身は朝露より輕し

第一句の「余幼人」は、『書経・大誥』に周公が成王を「我が幼沖の人」というのに模した語だろう。第二句「既頑且固」は、『魏書・三少帝紀』甘露元年夏四月の条の裴松之注に引く帝の文集所載の「自ら始生の禎祥を敘する文」に「惟れ予小子、(略)眇眇の身を以て、質性頑固」と述べているのによるだろう。この二句により、高貴郷公についての叙述であることを暗示し、続けて以下にその志の遠大にして才質の類稀なことを述べ、権力の陥穽に墜ちて無謀な反抗を試み、その結果あたら若き命を失ったことを追悼する。ここには高貴郷公自ら認める質性の頑固がわざわざいししたことを示唆しているようだが、その非命に倒れ

た真因には司馬氏の権力掌握という実態が挙げられる。そしてそれを招来したのは、文帝の「藩王は政を輔するを得ず」とする施政方針であった。

『魏書・明帝紀』によれば、明帝が病状重篤となった景初二年(二三八)十二月、「乙丑、帝不豫に寝ぬ。辛巳、皇后を立つ。(略)燕王宇を以て大將軍と爲す、甲申免じ、武衛將軍曹爽を以て之に代ふ」と記載する。燕王宇は、武帝(曹操)の子で、母は環夫人。『魏書・武文世王公伝』によれば、「明帝少きより宇と止を同じくし、常に之を愛異す。即位するに及んで、寵賜諸王と殊なり。青龍三年、徵されて朝に入る。景初元年、鄴に還る。二年夏、復た徵されて京都に詣る。冬十二月、明帝疾篤し。宇を拜して大將軍と爲し、屬するに後事を以てす。署を受けて四日、宇深く固く讓る。帝の意も亦た變じ、遂に宇の官を免ず」として、明帝が宇にいったん後事を託したにもかかわらず、数日ならずしてこれを免じ、曹爽に代えたことを記している。そしてこの間の経緯について、上述の『明帝紀』の記事の裴松之注に引く『漢晋春秋』が詳細に伝えている。その概略を述べれば次のようである。

明帝は宦官の中書監劉放、中書令孫資を重用したが、帝の不豫に及んで、二人は帝の死後燕王宇・屯騎校尉曹肇ら

により害されるのを懼れ、宇が帝の傍らを離れ曹爽ひとり残っている隙に近づき、涙を流し訴えた、「陛下氣微なり、若し不諱有らば、將に天下を以て誰に付せんとするや」帝「卿燕王を用ふるを聞かざるか」放「陛下先帝の詔勅に、藩王は政を輔するを得ずとあるを忘るるか。且つ陛下方に病む。而るに曹肇、秦朗等便ち才人の疾に侍する者と言戲す。燕王兵を擁して南面し、臣等の入るを聽さず、此れ豎刁・趙高なり。今皇太子幼弱にして、未だ政を統ぶる能はず、外強暴の寇有り、内勞怨の民有り、陛下遠く存亡を慮らず、近く恩舊に係はる。祖宗の業を委するに、二三の凡士に付す。疾に療ぬること數日にして、外内壅隔され、社稷危殆す。而も己知らず。此れ臣等の心を痛ましむる所以なり」帝は放のことばに大いに怒り、「誰か任すべき者ぞ」という。そこで放、資が曹爽を挙げて宇に代え、又「宜しく司馬宣王に詔して相參ぜしめよ」と上奏すると、帝はこれに従ったという。

『明帝紀』の「景初三年春正月丁亥」に次の記事がある。太尉宣王還りて河内に至る。帝驛馬もて召し到らしめ、引いて臥内に入れ、其の手を執りて謂ひて曰く、「吾が疾甚だし、後事を以て君に屬せん。君其れ爽と與に少子^{少子}を輔せ。吾 君を見るを得て、恨む所無し」と。宣王頓

首流涕す。即日帝嘉福殿に崩す。時年三十六。

ここに記す司馬懿（宣王）を河内から召到した驛馬こそ、阮詩第一段落の「哀鳴外顧」しつづ龍騰して疾駆する驛馬に託した実像ではなからうか。後に司馬懿は曹爽の隙をついてクーデターを成功させ、以後その子の師、昭、またその孫の炎と権力を引き継ぎ、その間^間^間王芳・高貴郷公髦・陳留王奐と若い魏朝の天子を傀儡としつつ、司馬氏はついに晋王朝を実現し、その野望を遂げるのである。

第五段落は、赤松子・王子喬のごとき仙界への逍遙を否定して、俗世を超越した境地に遊び、我が寿命を成就することしよう、と詠う。

焉知松喬

焉んぞ知らん松喬の

願神太素

神を太素に願ふを

逍遙區外

區外に逍遙し

登我年祚

我が年祚を登^あさん

「松喬」は、神仙の代表として五言「詠懷詩」においてしばしば詠うが、それは憧憬の対象でこそあれ、実現を期し得ない存在として認識されていた。例えば「昔神仙なる者有り、羨門及び松喬と。九陽の間に噲習し、升遐して雲霄を嘖ふ」(其八十一)とそれへの憧憬を詠うが、また「門を出でて佳人を望むも、佳人は豈に茲に在りや。三山に松

喬を招くも、萬世誰か與に期せんや」(其八十)といい、秦の始皇帝が海中の三神山に仙人が居るといふ話を信じ、徐市らにこれを求めさせたが得られなかつた故事を用いて、神仙に会うことの不可能なことを述べる。

「太素」の語は、黄節が指摘するように『列子』天瑞第一「夫れ有形の者は無形に生ず、則ち天地は安れより生ずるや。故に曰く、太易有り、太初有り、太始有り、太素有り。太易は、未だ氣を見ざるなり。太初は、氣の始めなり。太始は、形の始めなり。太素は、質の始めなり」の文を出典とする。ここでは、天地以下の万象の生起する段階を、太易↓太初↓太始↓太素という順に説明している。阮籍はその「通老論」において「聖人は天人の理に明かに、自然の分に達し、治化の體に通じ、大慎の訓に審かなれば、故に君臣は垂拱して、太素の機を完うし、百姓は熙洽し、性命の和を保つ」と用い、また、「老子賛」では「陰陽測られず、變化倫無し、太素に飄飄し、虚に歸り眞に反る」と用いている。

この二句一聯には、神仙とは元始の素朴の中に精神を養うものと觀念しつつ、一方それは実現を期しがたい世界だとする認識があるのではないか。そして、神仙的純粹素朴な精神世界に達することが不可能であるならば、せめてこ

の俗世を超越した境地に逍遙して、与えられた寿命を成就全うしたいと詠いおさめるのが、最終聯の二句である。ここで「區外」とは、具体的には權力をめぐる暗闘する俗世を避けた退隱の境遇という意味であろう。

むすび

以上三首の四言「詠懷詩」の内容について分析検討をくわえたが、各詩における寓意表現と史実との関連性について、次のように言えるのではないかと思う。

〈其四〉では、冒頭八句の叙景に寓意をこめている。すなわち曹植の「文帝誄」とその「序」、および文帝曹丕の「與朝歌令吳質書」中の語句を模した「陽精炎赫：谷風扇暑」の叙景により、文帝の崩御と同じ仲夏五月の季節に弑虐された高貴郷公の死を暗示し、また「激電震光、迅雷遺音」の叙景により、高貴郷公の死の際「暴雨雷霆、晦冥」という天候の激変があつた記事と関連させるなど、叙景により史実を暗示する手法を用いていると推察する。

〈其十〉においても冒頭四句が寓意の所在で、ことに「研精典素、思心淹留」の語句に寓意説明の手がかりがある。「研精典素」とは經典にくわしい意。また「思心淹留」とは、君主の思慮がとどこおることをいう。「淹留」の語を用い

た意図は、高貴郷公の事件直前、司馬氏子飼いの臣ともいうべき石苞が郷公を訪ね終日留まった（淹留した）のち、司馬昭にその理由を「何淹留也」と問われ、「非常人也」と応じた事と、「思心」がとどこおった（淹留した）ことを関連させ、事の真相を暗示したのではないかと推察する。

〈其十三〉は、文帝曹丕が「南皮之遊」を回顧した「與朝歌令吳質書」中の語句を模したと思われる第二段落四句により、魏朝の盛時が去り衰運がめぐってきたことを暗示する。そして第四段落六句により若き天子高貴郷公が類稀な才質と遠大な志をもちながら、権力の陥穽に墜ち、あたかも命を失ったことをいう。「嗟余幼人、既頑且固」の「頑固」ということは高貴郷公が自らを「質性頑固」と述べていることに符合する。この詩では第一段落の「飛駟龍騰哀鳴外顧」の寓意の所在が難解であるが、「外顧」（「内顧」の対義語、外様大名に顧託する意）の語意に注目すれば、明帝が臨終の際司馬懿を驛馬で召し後事を託したことに結びつく。

阮籍の四言「詠懷詩」が寓意の作であるか否かは、表現の奥に史実の存在が認められるか否かにかかっているといえよう。その意味からすると、右の三首の詩は寓意の作と

判じてよいのではないだろうか。

注

- (1) 「寓意と史実——阮籍の四言「詠懷詩」をめぐる——」（『中国文化』第六十六号 中国文学学会 平成二十年六月）
- (2) 『阮步兵詠懷詩註』（華忱之校訂 一九八四年・人民文学出版社）所収
- (3) 「系風 系疑屬景字之形誤」 趙幼文『曹植集校注』（人民文学出版社 一九八四年・北京 三五一頁参照）
- (4) この箇所原文は「會は雨、有司奏卻日、」であるが、宋・劉義慶『世說新語』方正第五の劉孝標注に引く『魏氏春秋』は「會雨而却。明日」に作っている。
- (5) 『詩三家義集疏』下冊（王先謙撰 中華書局出版 一九八七年二月）六〇七頁参照
- (6) 拙稿「阮籍と『詩経』——四言詠懷詩を例として——」（『中国文化』一九八五—漢文学会会報第四十三号—）大塚漢文学会、昭和六十一年六月）を参照。